令和５年度倉敷市立自然史博物館協議会　議事録（要旨）

開催日時）令和５年７月２０日（木）９時３０分～１１時

開催場所）倉敷市立美術館３階第２会議室

報告事項）令和４年度事業報告
令和５年度事業計画
ライフパーク倉敷リニューアル及び新自然史博物館整備基本方針

出席委員）赤崎哲也委員、碇京子委員、石垣忍委員（会長）、尾﨑勝也委員、片岡博行委員、堀江明香委員、三宅誠治委員（副会長）、宮原勝志委員、山﨑法子委員、吉岡勉委員

欠席委員）なし

事務局）仁科康教育長、早瀬徹教育次長、森茂治生涯学習部長、杉本紀明館長、三谷潤二郎主幹、奥島雄一主幹、武智泰史主幹、萩原知博主任、江田伸司学芸員、鐵慎太朗学芸員

傍聴者）なし

議事録（要旨）

１　開会

事務局：
　これより令和５年度倉敷市立自然史博物館協議会を開催する。

事務局（教育長）：
　自然史博物館は、本年１１月をもって開館から４０年を迎えることとなった。開館以来、自然に関わる資料の収集、保管、調査を行い、展示事業を通じてこれらを未来に継承するという役割を担うことを目的に様々な業務にあたってきた。今後も、利用者の皆様に企画展や講座、野外観察会など各種機会を提供していくとともに、新自然史博物館整備事業への対応も進めていきたい。この協議会は、博物館法及び倉敷市立自然史博物館条例に基づき設置されたもので、委員の皆様には、博物館の運営に関し、意見を述べていただく機関とされている。皆様には、幅広い観点から、忌憚のないご意見を賜りたい。

２　委員並びに職員自己紹介

３　報告事項
会長：
　コロナで３年間失われたが、その間各地では、通常ではできないような仕事を進めたり、コロナ後の発展を目指して新たな事業やリニューアルの準備が行われたようである。倉敷市立自然史博物館はリニューアル移転という大きな課題があり、本年度は貴重な１年になる。委員の皆様には忌憚のない意見をお願いしたい。
　令和４年度事業報告・令和５年度事業計画・ライフパーク倉敷リニューアル及び新自然史博物館整備基本方針について、事務局で説明をお願いする。

事務局：
　まず、令和４年度事業報告につき、館報にある倉敷市立自然史博物館中期計画の項目に沿って主だったものを紹介する。
　資料収集保管事業に該当する「集めて未来につなげる」では、収蔵標本は開館約４０周年の令和４年度末までに総計１，０４６，５００点に達した。その９３％が寄贈によるものである。植物（３２０，７００点）と昆虫（６０１，６００点）については収蔵点数で中四国ではトップクラスである。これらの標本は展示のほか、研究などに用いられている。例えば、昨年度は植物の種に関する論文に当館の標本が利用された。
　調査研究事業・展示事業・教育普及事業に該当する「教養文化の向上をめざす」について説明する。まず、調査研究事業での野外調査回数は計１１５回で、著作件数は１２２件であった。著作の中では、例えば、昨年度は岡山大学文明動態学研究所編の「大学的　岡山ガイド―こだわりの歩き方」に当館学芸員が寄稿した。展示事業では特別展として「倉敷動物妖怪展 at 自然史博物

館」を開催し、会期中に１６，６０８人の観覧があった。また特別企画展として「倉敷にクジラがやってきた！～海はつながっている～」を開催し、会期中に９，０９３人の観覧があった。特別陳列としては「新着資料展＜昆虫　澤田博仁コレクション＞」「畠田和一貝類コレクション展６・７」「むしむしサロン」「第３０回しぜんしくらしき賞作品展」「折り紙昆虫展」を開催した。教育普及行事としては、自然観察会・博物館講座・各種教室・出前講座などを開催した。

「人づくりを担う」では、ボランティア活動では計６００人の活動があった。職場実習の受け入れでは１３校から計２６人受け入れた。利用者への支援・情報提供では館外者との論文投稿などが３５件あり、レファレンス対応では１，０１５件対応した。

「連携して共に成長する」では、収蔵資料の連携した活用として、「まちかど博物館」の新規申し込み件数が２２件、新規貸し出し件数が５３件であった。他館への展示協力件数は３件だった。博物館友の会と協力した事業は共催行事件数が３１件で、博物館友の会への講師派遣行事数は６件だった。

「より魅力的な博物館をめざす」では施設利用者数が４６，８６７人で、令和３年度の２４，３２２人に比べ大幅に増えた。また、博物館の受付周辺の環境の改善を図った。広報活動ではマスコミ報道件数が７１件、ホームページアクセス数が１７６，１０８件、メールマガジン登録者数は１，３９６件メールマガジン配信数は１３件、Twitter 投稿数は４４１件、Twitter フォロワー数１，１０５件、Instagram 投稿数は１１５件、Instagram フォロワー数は８５４件で、いずれも令和３年度に比べ増加した。

続いて、令和５年度の事業計画につき、「倉敷市立自然史博物館２０２３年度イベントカレンダー」にもとづき紹介する。

まず、展示では、第３２回特別展「倉敷市立自然史博物館秘蔵お宝展」を開催中である。これは当館が長年にわたり収集した１００万点を超える資料の中から選りすぐったものを展示紹介しているものである。また、同時開催の「むしむしサロン」は昆虫に関するイベントを介して人同士が交流する企画である。そのほかに、特別陳列として、「新着資料展」・「第３１回しぜんしくらしき賞作品展」・「まちかど博物館ほか標本展示閲覧会」・「みんなの動物ラボ・脊椎動物グループ発足１１周年『テン+one 展』」・「畠田和一貝類コレクション展」を実施・計画している。

自然観察会は倉敷市立自然史博物館友の会の協力も得ながら計２６回、実施・計画している。実施場所は倉敷市内のほか、県内各地や鳥取県である。６月１８日の「高梁川流域自然たんけん（矢掛町）」では約１３０人もの方々にご参加いただき大変好評だった。また、１１月には「自然史博物館まつり」を予定している。講座などについては計２５回、実施・計画している。また、このほかに特別展の関連イベントなども予定している。

事務局：

「ライフパーク倉敷リニューアル及び新自然史博物館整備基本方針」について資料をもとに説明させていただく。

「倉敷市公共施設等総合管理計画」に基づく「倉敷市公共施設個別計画」により、自然史博物館はライフパーク倉敷に移転し、ライフパーク倉敷と機能を複合化した整備を検討する方針が示されている。これを受けて「ライフパーク倉敷」のリニューアルと「新自然史博物館」整備の基本方針を示すものとして令和５年３月に、「ライフパーク倉敷リニューアル及び新自然史博物館整

備基本方針」が策定された。
　一般的に博物館のような新しい施設を造る際は最初に設置の理念・機能・役割を概念的に示した基本方針を決め、その後、具体的な基本計画を決め、建築・展示・施工などを行っていく。その基本方針は新しい自然史博物館のコンセプトや整備方針を示すものとなっている。
　この基本方針の中で、めざす姿としては市民学習センター・科学センター・埋蔵文化財センターに、自然史博物館が加わり、天空の世界から、地上の生き物、そして地底に眠る古代の遺物まで、いにしえから今を、そして未来を生きる私たちへライフパーク倉敷は「知の拠点」としてリニューアルし、時空を超えて、あなたの「知りたい」に応えます。そして新自然史博物館は「知の拠点」の一翼としてあなたに「チカラ」を届けます、としている。
チ「知」教養・文化の向上をめざす施設へ
カ「学」調査・研究の深化をめざす施設へ
ラ「楽」市民が集い憩うにぎわいの施設へ
このようなイメージで新しい施設づくりを進めていきたいと考えている。
　今までのライフパーク倉敷と自然史博物館の経緯や課題は資料のとおりである。
　ライフパーク倉敷リニューアルの整備方針としては、ライフパーク倉敷の各施設の一体化・回遊性の向上・観覧者増・倉敷市の持つ知的財産の市民への還元を行うための基本的な方針を示している。また、新自然史博物館整備基本方針としては、全体コンセプト・整備方針・展示のコンセプトや方針・整備指針の基本的な考えを示している。なお、この基本方針策定に当たっては、令和４年６月に教育委員会７名、市長部局３名の職員からなる検討チームを設置し、自然史博物館とライフパーク倉敷の現状と課題、今後の方針について意見を求めている。ライフパーク倉敷についても同様の考えから、７月に教育委員会７名、市長部局１名からなる検討チームを再編成し、２回、計３９項目について３３５件の意見を集め、２回の協議を経て意見を集約している。
　この基本方針に基づき、今年度は基本計画を決め、より具体的な新しい自然史博物館の姿を市民に示したいと考えている。

会長：
　いままでの事務局からの報告につき、意見はないか。これ以外のことについても意見を述べていただきたい。

委員：
　自然史博物館の行事については自然史博物館友の会も実施に携わっている。また今年度の１１月の「自然史博物館まつり」友の会としてもいくつかブースを出す予定である。6月１８日の「高梁川流域自然たんけん（矢掛町）」では多くの参加者があり、コロナ後に参加者数復調の兆しが見えている。

会長：
　自然史博物館は少ない職員で例年多くの行事をしているが、これは自然史博物館友の会が一緒にやっているのでできていることと思う。新自然史博物館への移行作業はあるが、今後も自然史博物館友の会との関係を発展させていただければと思う。学芸員の方は過労にならないようにお

願いしたい。

委員：
　大阪の博物館に籍があるが、倉敷市立自然史博物館には大阪の大学にいたときに出入りしていた。当時、活発に多くの行事が実施され、市民との交流があったと思う。手元のイベントカレンダーに多くの行事が掲載され、活発に活動していると思う。

委員：
　学校関係者としては遠足などの行先で、倉敷市内中心に行く場合、美観地区・大原美術館・自然史博物館にセットで行く場合が多く、これは県外の学校関係者に尋ねても同じような傾向がある。しかし、ライフパーク倉敷と自然史博物館の両方は行かないことが多い。倉敷市は広島や関西に行くついでのショートステイになりがちである。自然史博物館がライフパーク倉敷に移転するとライフパーク倉敷での滞在時間が増えるのではないかと期待している。そして、プラネタリウム・昆虫・埋蔵文化財といった見学の選択肢が増えることは子供にとっても良いことと思う。
　倉敷市中心部の大原美術館は多くの学校関係者が子供を連れていきたいと考えている。倉敷市中心部とライフパーク倉敷という２大拠点ができると、修学旅行では倉敷に１日滞在してもらえるのではないかと思う。

事務局：
　基本方針にあるように、自然史博物館がライフパーク倉敷に移転するということは、回遊性の向上や相乗効果のアップが期待できる。ぜひ、素通りさせないというような、魅力アップに努めていきたい。

事務局：
　自然史博物館がライフパーク倉敷に移転することに関しては、市民には賛否両論あると思う。学校教育の面では、すでに科学センターを中心に実績のあるライフパーク倉敷に加わることは有利である。一方、公共交通機関を利用する観光客にとっては、交通が不便で足を運びにくい。観光客もライフパーク倉敷まで来ていただけるよう魅力アップの努力をしていきたい。皆様のお知恵を拝借したい。

会長：
　学校利用の面・観光面の双方からいろいろな意見はあると思うが、博物館は調査研究・資料を未来に伝えるということも重要な仕事である。バランスをとりながら仕事を進めていただきたい。利用者に知っていただくのも重要。外から見えにくい仕事もある。

委員：
　交通も重要である。乗車したくなるように、バスの車体そのものが恐竜や昆虫がイメージできるのが良い。

会長：
　岡山理科大学の恐竜学博物館では地元のバスの車体にタルボザウルスを描いている。

委員：
　自然史博物館がライフパーク倉敷に移転することに関し、基本方針の策定では現場の学芸員の意見はどうなっているのか。建物が出来上がった後に、現場の意見が反映されていないということは、ありがちである。現場の声を吸い上げていただきたい。
　基本計画の目指す姿の「チカラ」のキャッチフレーズはわかりやすいが、「知」は具体的に何であるか、オリジナリティはなにか。

事務局：
　現場の学芸員の意見は重要である。学芸員の持っているものを反映させていくことは、良い博物館を作る時の参考になる。基本計画の策定では学芸員の方向性をまとめていくときの手助けをしたい。
主役は市民なので、市民に満足していただけるように学芸員の意見を反映していきたい。
　「知」の意味は１つではない。１００万点を超える収蔵資料・教育普及活動などがある。それらの知的財産を市民の方に還元されるよう、努力していきたい。今後は基本計画策定で「知」の部分をより具体的に明らかにしていきたい

会長：
　他に何かあるか。

委員：
「学」についても、市民に対して具体的に何をどのように提供していくのか。

事務局：
「学」についても、今後の基本計画で明らかにしていきたい。

会長：
スローガンは解釈がいろいろできる。今後の基本計画策定でブレが出ないようにしていただきたい。

委員：
　事業報告の説明にあった特別展や特別企画展などは楽しんでもらうための努力が出ていて素晴らしかった。事業報告などを見ても、皆さんよく頑張っている。なお、自然史博物館の移転についての検討チームには学芸員に入っていただくと完成後に現場の力が発揮しやすいだろう。ライフパーク倉敷の交通機関が良くないので改善していただきたい。
また、最近は虫嫌いな子が多くなっているようだが実際にどうなのか。対策はどのようであるか。

事務局：
　自分の世代とは異なり、すでに親世代が自然に親しんでいない。自然史博物館としては、虫好きを増やす方策としては、各種行事などで、親子で参加できるイベントとを多く予定している。今「むしむしサロン」として、生きた昆虫を地階の講義室で触れ合うように体験型のイベントを行っている。野外に出たことがない親が、いきなり野外に子供を連れていくことはハードルが高いので、安全な室内で昆虫と触れ合ってもらうことを目的の一つとした事業である。また、昨年度から今年度にかけて行われた特別陳列「折り紙昆虫展」は、昆虫に興味のある方以外、すなわち、折り紙に興味のある方にもお越しいただくことをめざした。このように多方面からの来館の努力をしている。

委員：
　新しい自然史博物館では、収蔵庫の広さはどうか。標本は、今後、増えていくと思われる。また、水害の影響はどうか。

事務局：
　収蔵スペースは基本計画策定段階で考えたい。水害については市のハザードマップではライフパーク倉敷は浸水の確率が低いが、いろいろなケースを想定し基本計画策定段階で考えていきたい。

委員：
　新しい自然史博物館の収蔵庫については現有の標本はすべて収蔵できるということはもちろんのこと、今後増え続けていくものなので、余裕も含め十分に考えていただきたい。なお、標本の作製ができる人材が少なくなっている。博物館で幅広く標本の受け入れができなくなると、今後、そのような貴重な人材が博物館に集まらなくなる。標本を通して人が集える場所であることが必要である。
　また、自然史博物館は開館４０周年を迎え、学芸員の世代交代の時期にさしかかっている。そのような状況でライフパークへの移転時や移転後の人員に際し、学芸員などの人員欠如が起こらないようにお願いしたい。またサポートスタッフも必要ではないか。
自然史博物館友の会のスタッフも高齢化しており、それらの方々は移転後は離れていくかもしれない。新しい場所で自然史博物館友の会などのボランティア人材を引き付けるような活動が必要ではないか。

事務局：
自然史博物館としては人員不足は困ることではあるが、人事に関することであり、自然史博物館側では対応できないことである。自然史博物館としては、移転は通過点にしかすぎず、移転後のあり方も重要であり、そこでもっと人的交流が生まれ評価してもらえるようにと考えている。

会長：
　博物館の収蔵庫は目につかない場所で、博物館というと一般的には展示室を見る場所という認

識がある。収蔵庫は狭めてしまえばよいという乱暴な議論もあるが、実は収蔵庫に多くの標本があり、そこが博物館のエネルギーの源になっているということをわかっていただければと思う。今まで一般的には収蔵庫は非公開という状況だったが、最近は見せる収蔵庫という取り組みもいくつかの博物館で始まっているということを聞いている。例えば、収蔵庫をガラス張りにして、展示コースの一部として、現場でどのような作業がなされているかということを市民の方にわかっていただくことも重要かもしれない。

委員：

自治体の博物館は市民の税金で運営されている。倉敷市立自然史博物館は職員はもとより無償の多くのボランティアの方が標本作製を行ったために中四国地方第１位の数の収蔵標本を有する博物館になった。すばらしいことと思う。寄贈された標本は整理されなければならない、その整理を積み重ねたからこそ今の倉敷市立自然史博物館がある。

全国的に見るとさらに多くの学術標本を所有している方々の高齢化が進み、膨大な標本が行き場を失っている。国でやればよいができていない。倉敷市立自然史博物館はそのような標本を積極的に受け入れてきたから現在のような膨大な数の標本を有することになったのだろう。
標本整理のスタッフや大きい収蔵庫を作るにはお金がかかるだろうが、現在、全国的に膨大な量の学術資料が受け入れ先を失っている。収蔵という一番大きな問題が一番後ろにならないように、計画を作る時に考慮してほしい。

倉敷市立自然史博物館は収蔵標本に関し全国的に注目されている。積極的に昆虫標本を受け入れているので、私の岡山県に関するコレクションもお願いしようかと思う。倉敷に対する期待は高い。

会長：

同感である。私の周りにも標本をどうしようかという相談が時々ある。倉敷市立自然史博物館を紹介することもある。１００万点の標本というのは重い意味がある。それを管理していくことで、例えば、将来の５０年後、１００年後の人々が、現在の状況を知る上での手掛かりになるだろう。

委員：

学校として遠足・校外学習を行っていた。自然史博物館の利用者数はコロナによる影響はあったものの全体に右肩上がりである。ライフパーク倉敷にいくことをチャンスにしてほしい。自然史博物館は折り紙昆虫展のようにいろいろとコラボの展示などで工夫している。移転後はプラネタリウムと自然に関する展示の両方が見れる、ということをチャンスにしてほしい。ライフパーク倉敷の交通の利便性についての問題はある。バスの工夫は必要である。

学校の遠足でも行程を組みやすくなる。その普及活動は学校でできる。市として保護者・地域へのＰＲも必要。楽しみである。自然史博物館の人員スタッフの十分な確保をお願いしたい。そこで失敗すると大損失になる。

会長：

博物館では、遊園地での楽しいとは異なった楽しさがあるということを市民の方々に知っていただくのが良いと思う。今、問題になっている少子化に関しても、教育支援・子育て支援での、施設の持つ重要な役割があるということを知っていただけたらと思う。

委員：
今、科学センターに勤めている。自然史博物館がライフパーク倉敷に来るのは賛成だが、現状でも子どもの団体見学のバス駐車場の不足でその見学をお断りしている状況もある。その点は心配している。

会長：
対策を考えていただきたい。

委員：
ライフパーク倉敷は交通が悪い。子供を連れていくときには車でないと行けないので、直行バスがあれば便利。
どのような博物館にするかということに関しては、市民目線の魅力と、「知」とは何かを含め調査研究のバックの部分が重要ならそこも考えるべきである。通常、調査研究は目につかないが、市民にそこを見せられるようになれば良い。虫嫌いが多いが、触れ合えば好きになる。学芸員は研究しているというイメージがあるが話すと面白いという印象を抱いてもらえると思う。

会長：
委員からいろいろ意見があったが、その議論を念頭に置きながら、進めていただきたい。プロジェクトが進むときにはチーム自体が明るくやっていけるかどうかが、結果に反映されるだろう。展示に関しても作る側がワクワクしてやると良い展示になり、市民にもそれが伝わる。せっかく大きなプロジェクトが進む。そこで１００万点の収蔵標本があることが市民に広く知れ渡り、それがさらに大きな発展につながると思う。発展につながるというのは、市民にとって、未来にわたって利用され続ける、貴重なものであり、誇るべきものであると認識されることだと思う。
本日の協議を終了させていただきます。

７　閉会あいさつ
事務局（生涯学習部部長）：

８　閉会
事務局：
これにて令和５年度倉敷市立自然史博物館協議会を終了する。

閉会後、第３２回特別展「倉敷市立自然史博物館秘蔵お宝展」展示解説

以上を、令和５年７月２０日開催の令和５年度倉敷市立自然史博物館協議会議事録（要旨）と

することに同意します。

令和５年 9 月 25 日

倉敷市立自然史博物館協議会
会長　石垣　忍　印